

「西南学院史講義」の概要

「西南学院史講義」概要

1. 授業の到達目標及びテーマ

西南学院の歴史・伝統・建学の精神に触れることにより、本学に学ぶ意味を考え、西南に対する自信と誇りを持ち自己認識の確立を目標とする。

2. 授業の概要

授業はオムニバス形式で、多様な専門分野の担当者により幅広いテーマについて講義を行う。

3. 開講時期

2009年度前期

4. 時間・教室

月曜1時限・2号館203教室

5. 講座責任者

神学部教授 寺園喜基



大学博物館での説明に興味をもって耳を傾ける受講生

6. 西南学院史講義担当者

1	4月6日	寺 園 喜 基	イントロダクションとキャンパスツアー
2	4月13日	金 丸 英 子	キリスト教におけるバプテスタの位置
3	4月20日	寺 園 喜 基	西南学院の創立
4	4月27日	後 藤 新 治	旧西南学院本館と建築家ヴォーリス
5	5月11日	金 丸 英 子	C.K. ドージャーと西南学院
6	5月18日	松 見 俊	太平洋戦争開戦以前
7	5月25日	片 山 寛	太平洋戦争開戦以降
8	6月1日	L. ハンキンス	宣教師について
9	6月8日	L. ハンキンス	大学におけるチャペルとその役割
10	6月15日	小 林 洋 一	西南と緑―西南学院大学聖書植物園―
11	6月22日	武 井 俊 詳	大学開学とその後の発展
12	6月29日	伊 佐 勝 秀	大学の発展と学生運動、そして生協運動
13	7月6日	高 倉 洋 彰	大学とコミュニティーサービス
14	7月13日	G.W. パークレー	国際交流と西南学院

7. 学部・学科別受講者数

学部・学科	1年	2年	3年	4年	5年生以上	合計
神学部神学科	5	3	2	4		14
文学部英文学科	1	12	3	6		22
文学部外国語学科英語専攻	1	4	4	12		21
文学部外国語学科フランス語専攻			3	2		5
経済学部経済学科		1	1	1		3
経済学部国際経済学科				2		2
法学部法律学科	11	5	19	45	7	87
法学部国際関係法学科		1	6	8		15
人間科学部児童教育学科			1	3	1	5
人間科学部社会福祉学科			6	5		11
国際文化学部国際文化学科	2	6	3	8	3	22
合 計	20	32	48	96	11	207

第1回（4月6日）

「イントロダクションとキャンパスツアー」

寺園 喜基

初回はイントロダクションとしてキャンパスツアーを行った。まず2号館201教室に集まり、寺園がイントロダクションをする。その後、大学チャペル、元寇防塁、大学博物館の3箇所を見学したが、受講生が多かったので3つのグループに分けて重ならないようにした。大学チャペルでは安藤宗教局事務室長が説明。元寇防塁では事務局の吉田、塚田、中村の各氏が説明し、また移動の途中で聖書植物園の紹介も行った。大学博物館では同事務室の山田氏が説明し、またパイプオルガンの説明と短い演奏を安積宗教主事（音楽担当）が行った。

第2回（4月13日）

「キリスト教におけるバプテストの位置」

金丸 英子

西南学院を創立した米国南部バプテスト派は、プロテスタントの一派である。自らカトリック教会の僧であったマルチン・ルターは、当時の教会の在り方に心を痛め、1517年10月31日、「95箇条の提題」をもって聖書的で福音的な信仰と教会の在り方を問うた。これによって改革の火蓋が切られ、事態収拾に乗り出したカトリック教会は最終的にはルターを破門する。以後、人間の救いは、神の恵みのみによる神と人間の人格的な出来事であること、信仰と教会の規範は聖書のみであることというルターの主張が、プロテスタントの信仰の立場となった。

バプテストはこのプロテスタントの主張の徹底を標榜し、17世紀初頭にオランダで誕生し、イギリスで最初の教会が設立された。17世紀にアメリカに伝えられ、日本には宣教師を通して19世紀に伝えられた。「バプテスト」という呼称は、洗礼（バプテストマ）を意味するギリシャ語に由来する。誕生間もない子供に洗礼を施す従来のやり方（新生児洗礼）を否定し、自覚的な罪の告白に基づく洗礼こそが最も聖書的なあり方であると主張して成人洗礼（信仰者洗礼）を行った。そのため「洗礼にこだわる者」というあだ名が教派名となった。特に色濃く見られる特徴は、個人の自覚的で主体的な信仰の尊重、政教分離原則と良心の自由の擁護である。後者は、17世紀のイギ

リスで花開き、後にアメリカ合衆国建国の精神的な柱となった。合衆国憲法に政教分離原則と信教の自由の項目が入れられたのは、アメリカのパプテストの歴史的貢献である。

第3回（4月20日）

「西南学院の創立」

寺園 喜基

表記のテーマについて、4つの章に分けて講義した。第1章は「日本における宣教師と学校の創立」である。リギンズ、ウィリアムズという聖公会の宣教師によって立教（女）学院、平安女学院、桃山学院が、ヘボン、ブラウン、バラなどの横浜バンドから日本基督教会の教会が分れて明治学院、フェリス、梅光、金城などが、メソヂスト教会から青山学院、活水、福岡女学院などが創立された。以下略。第2章は「北部バプテストの来日と学校設立」という見出しで、ゴープル、ネイサン・ブラウンと横浜バプテスト神学校、関東学院、尚綱女学院の設立について。第3章は「福岡バプテスト神学校の設立」、第4章は「西南学院の創立」である。マッコラム、ブランソン夫妻の後を受けて、ドージャー、ロウ、ボールデン夫妻によって福岡バプテスト神学校が作られ、この校地と校舎を用いて、「私立西南学院」（男子中学校）が1916年に創立された事情を講義した。また、創立当初の西南学院について言及した。

第4回（4月27日）

「旧西南学院本館と建築家ヴォーリズ」

後藤 新治

はじめに — ドージャーとヴォーリズ —

西南学院創立者のC.K.ドージャー（1879年ジョージア州生まれ）と、西南学院大学博物館の建築家W.M.ヴォーリズ（1880年カンザス州生まれ）が、ともによく似たアメリカ人であることは意外と知られていない。

西南学院本館・講堂（1921）から大学博物館（2006）へ

本学院キャンパスでもっとも古い赤煉瓦造りの大学博物館はもともと1921年西南学院本館として建てられた。その後、中学校・高等学校の本館・講堂（チャペル）・職員室として利用され、2006年に現在の大学博物館となった。

1920-30年代のヴォーリズ建築

ヴォーリズは24歳で来日以来、滋賀県近江八幡を中心にキリスト教伝道を開始し、伝道の一環として学校や教会、デパートなど幅広く我が国の洋風建築を手がけ、特に住宅建築への影響は大きい。

西南学院大学博物館の改修工事

ジョージアン・コロニアル様式を基調に赤煉瓦で建てられた本館は、その後の度重なる改修で創建時の意匠が一部損なわれていたため、耐震補強を経て新たに博物館として当初の姿に復元改修された。

むすび — ヴォーリズの建築観とドージャーの建学の精神 —

当時の「建築仕様書」を読んでもと、そこに住む人とともに建築環境や素材に対する細やかな心遣いや愛情が滲み出ている。創立者ドージャーの建学の精神は、ヴォーリズの建築観によって見事に具現化しているのではないか。

第5回（5月11日）

「C. K. ドージャーと西南学院」

— 建学の精神と「日曜日問題」 —

金丸 英子

「西南学院に、くれぐれもキリストに忠実であるように伝えてほしい」。建学の精神として親まれるこの言葉は、1933年、天に召された創立者C. K. ドージャーの遺言である。ここには、終生ドージャーの胸中から消えることのなかった「日曜日問題」があった。

「日曜日問題」は、日曜日に公式試合に出た西南学院高等学部野球部を院長ドージャーが厳罰に処したため、院長辞任を求める学生ストライキに発展し、最終的には

ドージャー辞任で幕が引かれた一連の騒動を指す。宣教師でもあったドージャーは、安息日の日曜日の試合参加を絶対に認めなかった。西南学院が神によってたてられた学校であるとの信仰的確信からである。

これについて、後任のG.W. ボールデンはドージャーより柔軟であったが、ドージャーはこの学校運営に不満であったばかりか、学院側の軟弱な姿勢をも憂慮。亡くなる前年に、学校側が日曜日のスポーツのことで「弱腰になっている有様」を見て心が痛むと綴った。ドージャーにとっては、それは西南学院が世におもねって自らの使命を忘れ、学生の魂の配慮を軽視していることでもあった。学校として主日の遵守を貫くのは、ミッションスクールの社会的証として理解していた。

第6回（5月18日）

「太平洋戦争開戦以前」

松見 俊

私は、2009年度より初めて開始された「西南学院史講義」の第6回目、5月18日の講義を担当させていただいた。講義のテーマは「太平洋戦争開戦以前の戦争体制と西南学院」というものであったが、A4判1頁の講義レジュメと3頁の資料を配布した。ちょうど、『西南学院史紀要』第4号に「戦時下のチャペルと西南学院の戦争との関わり」を書かせていただいたので、基本的には、その論述の際に用いさせていただいた資料を中心に講義を構成した。私自身のコメントを背後に退かせて、資料をして語らせるという仕方で戦時下の西南学院が天皇制下のアジア侵略戦争に組み込まれ、無批判的に迎合していったかを呈示することが講義の目的であった。

私の講義でレポートを書ってくれた学生が7、8人いたが、レポートを読んで驚き、また、反省させられた。当時の学院指導者たちの戦争責任を問うことは、その関係者、親族の人たちが存命中であるので、余り厳しく糾弾するような語り口では講義できないこと、そして、私自身が比較的自由にものの言える「今、ここ」に立ち、歴史的に困難な状況を生きた諸先輩たちのことを安易に批判できないことのゆえに、多少柔らかな批判に留めたということもあったのか、学生たちのレポートは「まあ、あのような状況であったのだから、止むを得ない」というコメントが多かったのである。むしろ、ミッションスクールとしての学院関係者が、アジアへの侵略戦争と絶対天皇制にほとんど沈黙し、あるいは、むしろアジアへの侵略戦争に積極的に発言していたことに驚いたというコメントをしてくれた者が皆無であったわけではない。

戦争を知らない世代の学生たちに「長いものには巻かれない」精神を養わせるためには、隣国の韓国・朝鮮人キリスト者の絶対天皇制への抵抗、あるいは時代は少しあとになるが、ヒトラー体制へのドイツのキリスト者の抵抗など紹介して、日本の教会やミッションスクールのあり方を考えてみるという仕方もあったかと反省させられている。

第7回（5月25日）

「太平洋戦争開戦以降」

— 戦時下の西南学院 —

片山 寛

私の担当は「戦時下の西南学院」ということで、1941年12月の太平洋戦争勃発から1945年8月の敗戦までが守備範囲であった。しかし、戦争という巨大な出来事を90分の講義で紹介するというのは、それだけでも難しいのに、加えてその中で揺れ動いた西南学院を説明するとなると、これは私には全く不可能に思えた。そこで窮余の一策として、私は戦時下を生きた一人の人を取り上げて、その人の目を通して戦争を見る、という方法をとることにした。その「一人の人」とは、西南学院で働いた宣教師で、戦後、院長にもなられた、ウイリアム・マックスフィールド・ギャロット先生である。ギャロット先生の生涯をたどる中で、戦争が先生をどんなに苦しめたか、そしてにもかかわらず、ギャロット先生が日本人と西南学院をいかに愛し続けたかを、語る事ができるように思ったのである。

それは素晴らしい思いつきであったが、とはいえ、私の講義がうまくいったとはとても言えない。最大の原因は、戦時中のギャロット先生の生の声を伝える資料が少なすぎることである。そこでどうしても、彼を取り巻いた外的状況について、一般的な歴史資料から語らざるを得ず、そうすると最初に心配したとおりに語るべきことがどんどん広がって、結局は時間不足で講義を終らざるをえなかった。もしもう一度機会が与えられたならば、もう少し整理し直して講義したいと思う。

「宣教師について」

リディア・ハンキンス

西南学院の創立以来、今日までの、宣教師の働きと役割を考えるという内容で、資料写真を用いて、初期のドージャー、ボールデン、ロウという名前を知ることから、その後90年以上にわたる多くの宣教師の貢献、その特徴、性格、信仰、専門を知って、親しく感じ触れることを目指した。「なぜ遠い国であるこの日本に来たのか」という宣教師の精神を考える。また、多分影響したと思われる聖書のことばの紹介をし、南部バプテスト連盟からの宣教師派遣の時代の終焉及びその理由と現在を考えた。西南学院大学で学ぶ課題として、世界に出かけていくこと、人に仕えること、貢献すること、神に従うことは、単に過去のことだけではないこと。西南学院は宣教師を迎える側だけではなく、卒業生を世界に宣教師として、また地域開発、ボランティア活動のために国内外に派遣している。在学中に、各自がそれらの課題について問われ、自らの世界観、使命感、共生意識において、宣教師が先立ってこの学校の創立を促した歴史を学び、加えて、この大学が目指すもの、その将来について宣教師の精神を切り口に学習し、検討した。

「大学におけるチャペルとその役割」

リディア・ハンキンス

西南学院にチャペルは多くある。保存しているチャペルもあり、既になくなったチャペルもあり、新しく建てられたチャペルもある。90年以上のその歴史を辿り、チャペルを通して、学院の脈を計った。これまでヘレン・ケラー、コレッタ S. キング、賀川豊彦等、世界的著名人を迎えてきたこと。チャペル行事の写真を用いて、創立記念日、クリスマス・キャンドル・サービス、キリスト教フォーカス・ウィーク、チャペルで演奏・出演する宗教部グループ：チャペルクワイア、ハンドベルクワイア、ゴスペル・アクターズ（人形劇団）などを紹介、説明した。新チャペルが『光』というイメージで建築され、その象徴性を有している点考えた。チャペルイメージポスターの作成、チャペル計画の裏話を明らかにした。最後に、チャペルでのあり方や祈り方

を考えたが、チャペルのある大学に通っている各自にとって、その「チャペル」が何をもたらすかを検討し、参集を促した。

第10回（6月15日）

「西南と緑」 — 西南学院大学聖書植物園 —

小林 洋一

キャンパスの緑は西南の歴史と無縁ではない。本講義は、キャンパスの緑の歴史を知ることで、大学の重要な住環境であるキャンパスに対する一層の理解を深めようとするものである。

本学のキャンパスを彩る美しい緑も幾多の変遷を経て今日に至ったものである。一例を挙げれば、キャンパスには松が多いが、これは、1917年、松林だった松原の地が校地として購入されたためである。1956年、学院創立40周年記念に第一次緑化計画があり、25万円（現代の200万円）でヒマラヤ杉、カイズカなどが150本ほどチャペルの周辺、学生センター付近に植えられた。また、短期大学部卒業生が1万円の募金をして現チャペルの南側にヒマラヤ杉十数本を寄贈した。さらには、3号館と4号館の間のメインストリートの3号館側にある夾竹桃（20本）は、夫E.B.ドージャー（第9代院長）が亡くなった翌年（1970年）に、メアリ・E.ドージャー氏によって寄贈されたものである。

大学開学50周年（1999年）を記念して大学同窓会の寄付で始まった聖書植物園は、キャンパスの緑の歴史に新たに1頁を加えるものである。キャンパス全体に展開する聖書植物園は、「緑の考古学」の名のもとで聖書に登場する100種以上の植物を復元しようとする試みである。現在、聖書に登場する植物の主なものが復元、公開され好評を博している。

「大学開学とその後の発展」

— 開学するまでの苦勞と学部学科の充実 —

武井 俊詳

本講義の内容は「大学開学までの小史」、「文科系総合大学への軌跡」、そして「クラブの全国的活躍」である。

「大学開学までの小史」：戦前から大学設立の計画があり、1937（昭和12）年に干渉に校地を取得したが、日米関係の悪化・戦時体制となり、キリスト教主義の本学へ、「泰安殿」の設置強要や宣教師の米国への引き上げなど、干渉が厳しくなり、その構想の断念はおろか、存立そのものが危ぶまれた。しかし、終戦に至る年の1945年の福岡大空襲にも拘わらず、本学院は被災を免れ、翌年5月には大学設立準備委員会を発足させた。

「文科系総合大学への軌跡」：当初リベラルアーツ・コレッジを目指したが、当時の文部省の方針に従い学芸学部（神学専攻・英文学専攻・商学専攻）で開設を申請し、1949年に新制大学として開学した。その後、学部の増設と改組を行う一方、1971年からは法学研究科を皮切りに次々と大学院研究科を開設して、今日7学部12学科2専攻および法務研究科（法科大学院）を含め8研究科の大学院を擁する文科系総合大学へ発展してきた。その間、1960年代後半の大学紛争による荒廃を乗り越え、日本でも先駆的な交換留学制度の発足や語学ラボラトリーセンターの開設など「語学の西南」の礎を築いた。

「クラブ活動の全国的活躍」：本学のラグビー部の専門学校時代を含め9度の全国制覇をはじめ籠球部や自動車部の全国優勝など輝かしい足跡に触れた。

「大学の発展と学生運動、そして生協運動」

伊佐 勝秀

今回、「大学の発展と学生運動、そして生協運動」というテーマで講義を担当して、西南学院大学の歴史や現状に対する理解が深まり、一教員として大いに勉強になった。

具体的には、まず学生運動では、エンタープライズ号佐世保寄港阻止闘争や九州大学計算機センターへの米軍機ファントム墜落炎上事件、さらに神学校（神学部）問題など、九州や西南学院大学に固有の問題が絡んでいることを知り、自分が学生運動に対して抱いていた「東京中心史観」が少なからず修正された。また生協運動と学生自治会を含む学生運動とが互いに深く関連していることや、現在は活動休止状態にある学生自治会の再興が長年の懸案になっていること、また大学生協と大学当局がかつて学生運動を巡って微妙な関係にあったことなど、初めて知ることが多かった。

西南学院史を学ぶことは、地元（福岡・九州）を知ることにつながり、それは更に、その背景にある日本や世界の歴史を知ることにもつながる。その意味で自校史は、関係者（学生・教職員）がすべからく学ぶべき「教養」であると思う。

しかし今回の講義を通じて、学院史にはなお不明な点が多く、散逸している関連資料が少なくないことも知った。大学史に関するアーカイブとしての学院史資料室の一層の整備・発展に期待したい。

蛇足ながら今後は、西南学院大学での勤続年数が長く、キリスト教主義教育への理解の深い教職員にこのテーマで講義を担当していただければ、当時の様子などを交えた臨場感溢れる講義になると思う。

第13回（7月6日）

「大学とコミュニティーサービス」

高倉 洋彰

西新の町並は唐津街道（西新町商店街のある道路）の南側に展開したが、本学のある北側は砂地で市民生活に適さない場所であった。それが学校地区の適地となり、今でも本学や隣の修猷館高校に、市街の喧騒から隔離された恵まれた環境をもたらしている。当初は市民からの隔離をもたらしたが、今では民家に囲まれ、市民とともにある大学へと変身している。それは環境の変化や情報社会化の成果でもあろうが、孤高の大学から市民とともに生きる大学としての、本学自身の大きな変化も重視できる。日常を大学で過ごしていると気づかないが、大学博物館を訪れる人は口々に博物館の落ち着きと学内施設の美しさを語ってくれる。新築・改築によって学びの場のハードの面が一新されるとともに、大学院における社会人入試の実施、大学博物館の開放、西南コミュニティーセンターの設置、福岡市と共同した早良区子どもプラザ・西南子どもプラザの開設、元寇防塁や聖書植物園、さらには美味しくて安いと評判の西南ク

ロスプラザの料理など、市民が本学に気安く触れる機会をもたらしている。ここに、大学が地域を知らねば、地域に大学が知られることもないという教訓が明示されている。

第14回（7月13日）

「国際交流と西南学院」

G. W. バークレー

本テーマについて、まずはじめに本学の海外派遣留学生制度の歴史について説明した。1971年、アメリカの大学と開始したこの制度は、現在では北米、ヨーロッパ、そしてアジアの8つの国と地域にある27大学と協定を結ぶまでに発展してきた。この制度を利用し派遣された学生数及び留学生別科に受入れた留学生数について話し、さらに、1年間の海外派遣留学生制度以外に本学が実施している国際交流制度について言及した。長期休暇を利用して参加することのできる短期語学研修では、年間約200名の学生がオーストラリア、アメリカ、イギリスなどで学んでおり、また、日本への留学生のための夏期日本語研修は本学の強みであるとともに、留学生にとっても人気があるプログラムである。最後に、本学の国際性における将来像や私個人の展望（全学生数の少なくとも10%にあたる学生に短期もしくは長期語学研修プログラムに参加してほしいこと、また、学生数の10%にあたる留学生を受入れたいこと）を語り、本講義を締めくくった。